１．主屋 ロウカ上部の解体

取合部のロウカは南側で雨漏りしており、柱や桁、繋ぎ梁が腐朽している。これらの修理のため上部の垂木、天井等を解体した。写真はその状況。屋根は出隅と入隅が隣り合い、そもそも雨仕舞が悪い納まりである。その直下の繋ぎ梁は、腐朽部分をはつったところ、芯しか残らない状態であった。

現在は個々の部材の修理と補強方針について検討している。

２．主屋 大広間庇柱の補修

大広間の土庇柱は雑木の黒木柱を用いている。やや曲がりのついた独立柱で、自然石の礎石にひかり付けて建つ。このような黒木柱は紀州藩別荘であった湊御殿の書院土庇にも用いられており、当時の流行であったのかもしれない。

経年によって樹皮が剥がれた所や剥がれかかった所があるが、樹脂で補修し再用を図る。

３． 主屋 台所北東角の通し柱四方差し部分の腐朽

台所・ナンド境の三階までの通し柱は、雨漏りとシロアリによる腐朽が著しかった。

特に、差鴨居など差物が四方差しとなる仕口部分では、柱は欠損のため挫屈し、差物も仕口部分がほとんどなくなっている状態であった。今回の修理では、通し柱を当初の継手位置（二階窓敷居の高さ）で新材に入れ替え、差物は建て込まれたままの状態で修理することとした。

４．主屋 台所北東角の通し柱四方差し部分の修理

差物は、当初材（松）の芯は固く健全であったため、矧木及び継木による修理を行った。柱は、当初の継手（金輪）位置で継ぐことが出来た。ただし、建て込まれたままの状態の修理のため柱が後入れとなり、当初の四方差しの仕口のとおりには踏襲できないので、一部金具で補強する。

５．主屋 土間部の揚屋

土間台所部の揚屋（不陸調整）に取りかかっている。この部分は大梁が何本もかかっており、大広間や取合部に比べて、柱にかかっている荷重が非常に大きい。１本の柱を揚げるのに、関連する梁や胴差に６台の15t 油圧ジャッキをかけてやっと揚がる状態である。

揚げた柱は、礎石を据え直し、コンクリートで根巻して納めている。

６．主屋 土間台所部柱の補修

揚屋（不陸調整） と平行して土間台所部柱の補修も進めている。写真は台所・オオゲンカン境の柱。蟻害のため断面が欠損し、足元が座屈しかかっていた。

ジャッキで所定の高さまで持ち揚げた後、人工木材と矧木で補修している。